【ポスター発表】

学校教育における精神障害当事者の語りがもたらす意義

― 語りの活動による精神障害当事者の自己変容 ―

○　桃山学院大学　栄　セツコ（2721）

清水　由香（大阪市立大学大学院・3900）

キーワード：精神障害当事者・学校教育・自己変容

１．研 究 目 的

近年、精神病を患った経験に基づく知恵に対する価値が見直され、精神障害をもつ当事者（以下、当事者）が自己の病いの経験を語る機会がみられるようになってきた。その一方で、精神病に対する早期支援の有効性が実証され、精神疾患の好発時期にある中高生を対象とした精神保健福祉教育の必要性が強調されてきている。演者らは、2006・07 年度 A 市の就労支援等モデル委託事業の一つとして「教育現場における精神障害者の語りに関する事業」を受託した。事業終了後も、活動の継続を希望する当事者によって語り部グループ B（以下、グループ B）が結成された。グループ B では、当事者による病いの経験の語りを中高生に対する精神保健福祉教育の一環に位置づけて、研修・実践・成果報告を柱に活動してきた。当事者の語りを聞いた中高生には、自身のメンタルヘルスへの関心の向上と精神障害者に対する理解促進及び共生社会への意識醸成がみられた。

そこで、本研究の目的は、グループ B の活動に参加した当事者に着目し、その当事者の自己変容の認識及びその認識の関連要因を明らかにすることにある。

２．研究の視点および方法

１）情報提供者：グループ B のメンバーは９名である（2012 年 3 月現在）。性別は「男性」4 名で、「女性」は 5 名である。年齢は「30 代」が 2 名、「40 代」5 名、「50 代」「60 代」が各１名である。セルフヘルプグループへの参加者は 6 名だった。

２）調査方法：演者は 2006 年度から、当事者の語りを主とした精神保健福祉教育を企画し、共に活動してきた。研修では、語りの作成、語りの振り返り、語り直しを行ってきた。また、各年次における最終の研修では「語りによる自己変容」をテーマとして振り返りを行ってきた。活動におけるフィールドノーツを作成し、研修時のディスカッション等は録音し逐語録としてまとめた。本調査期間は 2009 年 4 月から 2012 年 3 月までである。

３）分析方法：①フィールドノーツと逐語禄のデータの意味を解釈しながら、情報提供者の「自己変容」に関する内容をコード化した。②語りに関する先行研究との比較検討を行いつつ、コード化したものを類型化しカテゴリーを生成した。③そして、カテゴリー間の関連性を図解した。語りによる自己変容として、【パワーレスな状態】【リカバリー：自己認識と心理的ウェルビーイング】【リカバリー：インテグレーション】【社会改革への意識醸成】の４つのカテゴリーが産出された。

３．倫理的配慮

情報提供者に、本研究の趣旨、研修時の録音の取り扱い方及びプライバシーの保護、成果の公表方法等を口頭と文書にて説明し、同意を文書で得た。尚、本研究は大阪市立大学生活科学部・生活科学研究科倫理審査委員会の承認を受けて実施している。

４．研 究 結 果

１）語りによる自己変容（【　】：カテゴリー、《　》：サブカテゴリー、〈　〉コード）：

グループ B に参加する前の情報提供者は、精神疾患を患い、〈心身の機能低下〉や〈内なる偏見〉及び〈経済力の低下〉などの《個人的要因》と〈社会における偏見や差別〉といった《環境的要因》により【パワーレスな状態】にあった。グループ B のメンバーとなり、病いの語りの活動の中で《自尊感情》《自信》《自己認識》《エンパワメント》《希望》や、〈価値の転換〉〈自己受容〉に基づく《ベネフィット・ファインディング》などの【リカバリー：自己認識と心理的ウェルビーイング】と、〈趣味を楽しむ〉〈楽しいことをみつける〉などの《関心ごとの拡大》、《体調管理》《就労の機会》などの【リカバリー：インテグレーション】がみられた。また、次世代を担う中高生からのフィードバックをえて、より一層〈社会における偏見・差別の解消〉の必要性を実感し、《啓発活動》《語り》《情報提供》に自らが参画しようという【社会改革への意識醸成】がみられた。

２）語りによる自己変容の関連要因：関連要因として、語りの【聞き手からのフィードバック】、語りの活動を共有する【グループ B の仲間の存在】【グループ B のスタッフ】、活動における【人々の出会い】、当事者の経験に価値をおく【時代的背景】があげられた。

5. 考 察

１）語りによる自己変容：語りによる自己変容として Rapp（2006）らが示したアウトカムとしての【リカバリー：自己認識と心理的ウェルビーイング】と【リカバリー：インテグレーション】がみられた。語りにより、自己形成や自己の一貫性が獲得され自己認識が図られるとともに、聞き手の存在という社会との接点をえて、抑圧された自己を開放し新たな自分の生き方を社会に参加しながら形成できたことから、当事者のリカバリーが促進されたと考えられる。また、次世代を担う中高生のフィードバックにより、社会の精神障害者に対する偏見の実状を知るなかで【社会改革への意識醸成】がみられたことから、学校教育における語りの生成過程が当事者のエンパワメントに寄与できるといえる。

２）語りの自己変容に関連する要因：当事者の語りが語り手と聞き手の双方にとって有効性をもたらすには、仲間の存在と聞き手との相互作用の質が重要であり、支援者にはセルフヘルプとソーシャルアクションの要素を組み込んだ支援を行うことが必要といえる。

本研究は、科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究 C）「中高生を対象とした精神保健・福祉教育プログラムの開発（課題番号 24530762：代表 栄セツコ）」の研究成果の一部である。